

日英語の対照研究

－「目」の慣用句を中心として－

石田プリシラ

【キーワード】 慣用句、語彙の場、対立、意味特徴、成分分析

1.はじめに

言語学習や翻訳の過程において、慣用句という言語表現の処理については特有の問題が生ずると思われる。異なる二つの言語には、ほぼ対応している慣用句が存在することもあるが、対応するものがない、あるいは意味や用法の間にずれや違いが見られる場合が多いからであろう。このような異同を明確にするために、言語的分析が必要だが、これまでは、慣用句の意味が言語的分析の対象とされることはあまりなかったようである。その原因の一つは、慣用句が単語とは違って、独自の構造上・意味上の特殊性を持っているということであろう。

本稿では、その特殊性を考慮に入れながら、語彙論・意味論の観点から慣用句を検討し、日英語の対照分析を行うことを目的とする。日英両言語の慣用句は数が多く種類も様々であるので、対象の範囲をしぼり、「目」の慣用句（つまり、「目」"eye"という身体語彙を含む日英語の慣用句）を対象とする。

2.慣用句とは

Cruse (1986) によれば、慣用句というものは第一に、二つ以上の語彙要素で構成されており、第二に、それは単一の最小意味要素である。つまり、慣用句とは単一の意味を持っている語彙的複合体である。なお Cruse は、慣用句を基本的な語彙単位であると考えている。慣用句は、語彙的な複合性を持つにも関わらず、単語に見られるような内部結合性もある程度持っているからである。

伊藤 (1989) は、慣用句が「形式的に、少なくとも2語以上からなり、統語論的、また意味的に、一つの統一体を形成し、語と同じような機能を持つ、語の結合」であると言っ

ている (p.7)。また、慣用句は *Idiomatizität* (「不透明性」)、*Stabilität* (「固定性」)、*Reproduzierbarkeit* (「既製品性」) という三つの特徴を持つとしている (伊藤 1989、1992¹⁾)。

「不透明性」は、意味のレベルでの特徴であり、慣用句を構成する要素の意味と、慣用句全体の意味との間に、関連性がないという性質である (例えば、「猫を被る」)。「固定性」は、構造的、統語的特徴であり、慣用句の構成要素を別の要素に置きかえることができないという性質である。そして「既製品性」は、語彙的な特徴であり、慣用句がひとつの語彙単位と同様に、統一体として文の中で繰り返し用いられるという性質である。

ところで、上述の特徴は絶対的なものではないので、個々の慣用句によって、不透明性や固定性の程度は異なっている (伊藤 1989、1992)。例えば、不透明性の程度が低いもの、即ち慣用句全体の意味と、それぞれの構成要素の意味の間に、関係が認められる場合がある (例えば「目を落とす」「目を向ける」)。また、固定性の程度が低いもの、つまり置き換えの制約が弱いものも見られる (「腕が下がる／腕が落ちる」「顔が潰れる／顔を潰す」など)。

慣用句と他の句の区別に関しては、宮地 (1982、1985) の分類が手掛かりになると思われる。宮地によれば、慣用句には「連語的慣用句」と「比喩的慣用句」とがあり、前者は「一般連語句」(例えば、「山にのぼる」「空が青い」) に隣接するが、それより結合度が高いという特徴をもっている (「気が強い」「愚痴をこぼす」など)。一方、「比喩的慣用句」は結合度が高い上、比較的はっきりした比喩的な意味を持つものである (「水を打ったよう」「兜をぬぐ」など)。ことわざ・格言と慣用句の関係については、ことわざは事実や事態の一面を簡潔に表すもの、格言は教訓的な意味を持つものであるが、慣用句は教訓的な意図からは遠いものだから、ことわざの方に隣接すると言う。また、慣用句とことわざの境界線は必ずしもはっきりせず、むしろ曖昧なものだとの指摘がある (例えば、「白羽の矢を立てる」「毒にも薬にもならない」)。

本稿では、上に述べた定義、特徴、分類を参照する。

3. 慣用句の意味分析

慣用句の意味を記述・対照するためには、構造的意味論で発展された語彙分析の方法、つまり成分分析が有効であると考えられる。以下、成分分析の理論的な枠組みを手短に述べてから、慣用句の成分分析方法を提出する。

3.1 場の理論と言語的対立

J.Trier に始まる場の理論 (Wortfeldtheorie) によると、共時的な段階における一つの言語の語彙体系は、その体系を構成している中身によって整理されている。即ち、語彙の総体は下位的な「語 (の) 場」(Wortfelder) によって構成されており、それぞれの語の場の間に横の関係、または縦の関係が成立している。個別の「語の場」全体の意味は、その場の中で機能している語彙単位によって決定され、それぞれの単位の意味は互いに作用しあう制限によって決まる (Coseriu and Geckeler 1981 pp.22-23)。

コセリウ (1981、1982a) は、場の理論にもともと暗示されていた「言語的対立」の学理を明確にし、構造的意味論の基本原理とした。コセリウによると、個々の「語彙の場」は一つの統一的内容(「価値」)を有しており、その内容は場の内部における事項(即ち語彙素²⁾)の間の対立によって下位区分される。

この観点から見ると、語彙素の意味分析は、その内容をより細かな要素、即ち「弁別特徴」(意味特徴)に分解することである。弁別特徴には、「意味素」と「類素」という、二つのタイプのものがある。「意味素」とは、一つの「語彙の場」で機能している、その場に特有のものである。例えば、ポティエが示した、<人が座る家具> (siège) の名称の分析で、<脚のある><一人用の><座るための>などは意味素である。「類素」とは、一種の意味素だが、語彙素の共起制限(文法的結合・語彙的結合)に関連する、より一般的なものであり、幾つかの「語彙の場」にわたって機能するものである。例えば、名詞には<生物/無生物>、<男性/女性>、動詞には<自動詞/他動詞>、<動作主着点型/動作主起点型>、形容詞には<プラス価の/マイナス価の>などの類素が認められる。

なお、コセリウが提唱している成分分析の目的は、語彙素が持っている意味特徴をすべて同定することではなく、同じ語彙の場に属している個々の語彙素が、他の語彙素から区別されるところまで、それぞれの語彙素の特徴を引き出すことである。従って、幾つかの語彙素間に存在する対立を出発点とし、その対立を成立させている意味特徴を取り出すことで分析を始める。つづいて、既に分析した語彙素に、他の語彙素を対立させ、段階的に語彙の場の構造を明確にしていくのである。

3.2 慣用句の成分分析

先行研究には、慣用句の成分分析の例は見られないが、本研究では慣用句を基本的な語彙単位と見做し (Cruse 1986)、構造的意味論の分析方法を用いることにする。

先ず、慣用句は、語彙素と同様に、一つの言語の語彙全体のなかで、様々な「語彙の場」を構成していると考えられる。同じ場に属している慣用句は、それらの間の相互関係によって、一つの「語彙的体系」を成立させている。つまり、個別の慣用句は、語彙素と同様に、意味上の弁別特徴の束となっている。何らかの意味特徴が共通している慣用句は一つの「語彙の場」をなしており、その場は、慣用句と慣用句の間に存在する対立により下位区分されている。成分分析によって、各々の対立を成立させている意味特徴（意味素及び類素）を引き出すことができるとする。更に、対照分析を行うことにより、日英語各々の場の構造、つまりそこに属している慣用句間の対立の仕方が、両言語間のどこで対応し、またどこで異同を示しているかを明確にすることができると思われる。

手法については以上だが、実際の適用には問題がないわけではない。弁別の意味特徴を引き出す際、的確に抽出しきれず、意味の言い換えにとどめてしまう場合があった。将来、この問題と取り組まなければならないが、ここでは、これまで行った分析を、初期の段階の試みとして提出する。

4.<注目する>ことを表す「目」の慣用句

4.1 語彙の場、意味特徴の設定について

本研究では、「目」(eye)の慣用句は日英両語において一定の体系をなしていると仮定しており、そこに幾つもの下位的な語彙の場が見出せると考えている。「目」(eye)の慣用句の用例を考察した結果、25の「語彙の場」を設定することができた。紙幅の制約により、ここでは「語彙の場」の全体像は記さないが、設定した場の代表的なものは以下の通りである。(場の統一的価値(意味素)は<>に入れて表し、つづいてその場に属すると思われる慣用句[の例]を挙げる。)

<視線を下へ移す> 目を落とす、目を伏せる、drop one's eyes、lower one's eyes.

<注意が引きつけられる> 目を奪われる、目を引く……、catch one's eye...

<驚き> 目を見張る、目を白黒させる……、one's eyes nearly popped out...

<眼識> 目が高い、目が低い……、have an eye for、have eyes [only] for

本章では、設定した場から<注目する>という価値を有すると思われるものを選び、そこに属している慣用句の意味特徴を取り出し、日英語の対照分析を行う³。日本語では、「目をつける」「目が光る／目を光らせる」「目を配る」「目が届く」といった慣用句が<注目する>ことを表しており、全体で一つの場を成している。一方、英語の方は、have an

eye on, keep an eye on, keep an eye out / keep an eye open / keep one's eyes skinned / keep one's eyes peeled が同様に語彙の場を成していると思われる⁴。

なお、これら以外にも、<注目する>という価値の認められる「目」の慣用句があるという見方もあるかもしれない。しかし、現段階では、それらの慣用句は別の場に属しており、その場の中で検討されるべきだと考えている⁵。

また、本来は、意味特徴の立て方と、その設定の妥当性について議論しなければならないが、今後の課題として別の機会に論ずることにする。以下、日英語それぞれの場の構造を考察するなかで、意味特徴の設定を試みながらそれを実証していく。

4.2 日本語慣用句の意味分析

「目をつける」「目が光る／目を光らせる」「目を配る」「目が届く」という日本語慣用句はいずれも注意して見たり、特別な関心をもって見たりする様子を表し、<注目する>という意味特徴を持つと思われる。先ず、「目をつける」だが、これは<対象を目的とする>という特徴によって他の慣用句から区別されているようだ。つまり「目をつける」は、対象に興味があり、それを手に入れたいと思って見るという様子を表す。以下の用例を参照。

(1)……硝酸プルトニウムならば、それは軽い放射能をおびているのみで、樽状容器でトラック輸送もされているから、ギャングはそれに眼をつけるだろうと、かれはいう。(大江健三郎『ピンチランナー調書』p.84)

上の例において、「目をつける」は【もの】を対象としているが、更に、【人】や【抽象物】を対象とする場合がある。以下の用例を参照。

(2)妙子は新制中学を出ると、一時小料理屋を手伝ったが、叔母はすぐ妙子を、私立病院の看護婦養成所に入れた。十六歳の妙子に数人の客が眼をつけたからである。(黒岩重吾『背徳のメス』p.137)

(3)凸版がハイビジョンの応用開発に目をつけたのは、十年以上も昔にさかのぼる。(『毎日新聞』(朝) 92.10.1 p.10)

いずれの場合も、ある目的のために(即ち、相手との関係をもちたいと思ったり、自分の利益を求めようとしたりして)人や物事に着眼するという意味を指し示している。

この場に属する他の慣用句はすべて、「目をつける」とは異なり、<対象に用心する>という特徴を持っていると言えそうである。つまり、対象を目的物とするのではなく、警

戒する気持ちで接するという意味を表す。先ず、「目が光る／目を光らせる」を見てみよう。これらは、同一の慣用句の異なった形式であり、どちらも＜対象に用心する＞という特徴を持っていると思われる。つまり、注意を怠らず人や物事を監視したり、不正やあやまちがないか鋭く観察したりするという内容を表す。以下の用例を参照。

(4) コーチの目が光っているので、練習中に手抜きはできない。(『成語林』)

(5) 昭和十九年が暮れる頃には、この小さな山に十二門の高射砲が配置され、高射砲隊一個中隊が常駐して、敵機の来襲に目を光らせていた。(柳田邦男『空白の天気図』 p.171)

ところが、それぞれの形式の内部構成を見ると、「目が光る」は「名詞＋自動詞」、「目を光らせる」は「名詞＋他動詞[＋助動詞]」という句構造を持っていることがわかる。従って、これらの形式は＜自動性＞＜他動性＞という類素によって区別されていると言えるだろう。

「目を配る」は「目を光らせる」と同じように、注意を怠らず人や物事を監視することを表し、＜対象に用心する＞（及び＜他動性＞）という意味特徴を持つが、両者の間には＜注意の範囲が狭いか広い＞という対立が認められるようである。即ち、「目を配る」は、油断なく方々を見る様子や、注意を細かいところまで行き届かせる様子を示し、視線（あるいは注意点）の移動を中心にしてとらえた表現である（＜注意の範囲が広い＞）。一方、「目を光らせる」は焦点をしぼって対象を見ることを表し、より直接・直線的な注意を示すものと思われる（＜注意の範囲が狭い＞）。以下の用例を比較のこと。

(6) ……神田大尉は、常に周囲に眼を配っていたから、どんなこまかい状況の変化も見落さなかった。(新田次郎『八甲田山死の彷徨』 p.128)

(7) 「……そのお二人のいざごは判りますが、越中守さまはなぜ銀座に目を光らせていなければいけないのでしょうか」(半村良『どぶどろ』 p.327)

「目が届く」は「目が光る／目を光らせる」「目を配る」と同様に＜対象に用心する＞という特徴を持っていると考えられる。また、句構造の観点から見れば、「目が届く」は「目が光る」と同様に＜自動性＞という類素を持つと言える。しかし、「目が届く」は＜非・意図的＞という意味素に対応しており、「目が光る」及び他の慣用句とは異なっていると思われる。つまり、「目が光る／目を光らせる」と「目を配る」は、積極的に監視することを示す（＜意図的＞）が、「目が届く」は、監視が行き渡る様子を表し、対象が主体の視野や注意の及ぶ範囲に入っているか否かを問題とする（＜非・意図的＞）。例えば、

「子供を目の(が)届く所で遊ばせる」のような用例はすぐ思い浮かぶものである。また、以下の用例を(4)-(7)と比較のこと。

(8)この部屋はアルバイトのメイドが掃除したもので、部屋の隅にあるナイトデスクの上まで目が届かなかったらしい。(森村誠一『夢の虐殺』p.91)

以上、引き出した特徴とその分布を次のように表示することができる。

図 4.2.1 注目する (日本語慣用句)

| 慣用句\意味素 | S 1 | S 2 | | S 3 | | S 4 | | C 1 | |
|---------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|------------------|-------------|-------------|
| | 注 目 目 | 目 的 | 用 心 | 狭 い | 広 い | 意 図 | 非 ・ 意 図 | 自 動 性 | 他 動 性 |
| 目をつける | + | + | - | ± | ± | + | - | - | + |
| 目が光る | + | - | + | + | - | + | - | + | - |
| 目を光らせる | + | - | + | + | - | + | - | - | + |
| 目を配る | + | - | + | - | + | + | - | - | + |
| 目が届く | + | - | + | ± | ± | - | + | + | - |

S1 注目する

S2 主体/対象の関係
・対象を目的とする
・対象に用心する

S3 注意の範囲

・狭い
・広い

S4 意図的作用

・意図的
・非・意図的

C1

・自動性
・他動性

4.3 英語慣用句の意味分析

つづいて、<注目する>という価値が共通している英語慣用句 (have an eye on, keep an eye on, keep an eye out) について考察してみよう。have an eye onは<対象を目的とする><対象に用心する>という意味特徴に関してはニュートラルであると思われる。つまり、have an eye onの意味は<+対象を目的とする>及び<-対象を目的とする> (また、<+対象に用心する>及び<-対象に用心する>) という価値に一致している。言い換えれば、この慣用句は<対象を目的とする>こと、つまり、【もの】(または【人】や【抽象

物]) を手に入れたいと思って着眼しているという意味を表す場合があり、

(9)The princess has been seen house-hunting in London and is said to have her eye on homes around Pounds 5 million. (CobuildDirect)

皇太子妃はロンドンで家を捜しており、約5百万ポンドの物件に目をつけていると言われている。

また、<対象に用心する>こと、つまり、【もの】(または【人】や【抽象物])を監視したり見守ったりするという意味を示す場合がある。

(10)You have apprehended...a most dangerous criminal. As you know, we've had our eye upon this house for some time. (The Kenkyusha-Longman Dictionary of English Idioms)

非常に危険な犯人を……逮捕しましたね。御存知の通り我々はしばらくの間この家を見張っていたのです。

このように主体と対象の関係を見ていくと、keep an eye onとkeep an eye outは、<対象に用心する>という特徴しか持たず、この点で前述のhave an eye onから区別されると思われる。keep an eye onは、注意を怠らず人や物事を見張るという様子を表す。

(11)Several countries, including Canada, are keeping a close eye on John Davies, a British-born minister who has been accused of baby trafficking in Eastern Europe...(Maclean's 1995.8.21 p.35)

カナダを含むいくつかの国では、ジョン・ディヴィーズを油断なく見張っている。彼はブリティッシュ生まれの牧師だが、東ヨーロッパで乳児売買をしているとして訴えられている。

一方、keep an eye outは、人や物事を見逃さないように警戒するという様子を表す。

(12)All the while Mrs. Michelle...kept an eye out for bad guys who might suddenly come upon children of different colors innocently enjoying being children. (Daily Yomiuri 1995.9.1 p.7)

その間、ミシェル夫人はずっと……子供であることを無邪気に楽しんでいる人種の違う子供達が、悪い連中に突然見つかってしまうかもしれないと、警戒していた。

このように、両者はともに<対象に用心する>ことを表しているが、上述の日本語慣用語(「目を光らせる」と「目を配る」と同様に、<注意の範囲が狭いか広いか>という特徴によって区別されると言えそうである。即ち、keep an eye onは注意を直接・直線的

にとらえており、焦点をしぼって対象を見ることを表している（＜注意の範囲が狭い＞）が、keep an eye out は注意の動きの幅に重きをおいてとらえ、方々を見ながら細かいところまで注意を行き届かせることを表すと思われる（＜注意の範囲が広い＞）。上記の用例(11)(12)を比較のこと。

更に、keep an eye on と keep an eye out の間には、上述の対立に平行してもう一つの対立が働いていると言えそうである。それは、＜対象が現われているか現われていないか＞というものである。keep an eye on は目の前の人や物事、あるいは現在起こりつつある物事を注意して見ている様子を表し、したがって＜対象が現われている＞という意味素を有していると考えられる。用例(11)と(13)を参照。

(13)The stewards...didn't like working in the kosher kitchen: it was too closely supervised.

Usually a rabbi sat in the corner, keeping an eye on us. (Saturday Night 1995.7/8 p.60)

給仕達は、戒律を守って作る料理の調理場で働くのが好きではなかった。調理場があまりにも厳しく監督されていたからである。たいてい、ラビが隅にすわって、我々を監視していた。

図 4.3.1 注目する（英語慣用句）

| 慣用句\意味素 | S 1 | S 2 | | S 3 | | S 5 | |
|-----------------|--------|--------|--------|--------|--------|-----|-------------|
| | 注 目 | 目 的 | 用 心 | 狭 い | 広 い | 現 | 非 ・ 現 |
| have an eye on | + | ± | ± | ± | ± | ± | ± |
| keep an eye on | + | - | + | + | - | + | - |
| keep an eye out | + | - | + | - | + | - | + |

S1 注目する

S2 主体／対象の関係

- ・対象を目的とする
- ・対象に用心する

S3 注意の範囲

- ・狭い
- ・広い

S5 対象

- ・対象が現れている
- ・対象が現れていない

これに対して、keep an eye out は＜対象が現われていない＞の方を持っていると思われる。特にある対象を追いかけるのではなく、対象が現われないかを見張る様子、見逃さないよ

うに注意する様子を表しているからである。用例(12)と(14)を参照。

(14) 'Keep an eye out for snakes, eh Deng?' (NZ: Kathleen Mayson, "The Weir" Landfall
162 Vol.41 No.2)

「ドンさん、蛇がいるかもしれないから、注意して下さいね」

以上述べてきた英語慣用句の特徴の分布は図 4.3.1 のように示すことができる。

4.4 日英語の対照分析

次の段階として<注目する>という特徴を有する慣用句について、日本語対英語という視点で見てみる。まず、場の構造についてだが、両者で対立の仕方が異なっていると言えるようである。つまり、両方の場に、<対象を目的とする><対象に用心する>及び<注意の範囲が狭い><注意の範囲が広い>という相対立する特徴が見出せるが、<意図的/非・意図的>及び<自動性/他動性>という対立は日本語側のみに見られる(4.2を参照)。英語の慣用句はこの軸では対立がなく、<意図的>及び<他動性>という特徴だけを持っている。従って、英語に限って見る場合、<意図的/非・意図的><自動性/他動性>という意味特徴は設ける必要がないと思われる。

更に、4.3 で述べたように、英語の場には<対象が現れている><対象が現れていない>という意味素が弁別的に働いているが、日本語側には、後述するように、この対立は見られないようである。

引き続き、4.2 と 4.3 の分析から、意味が最も近いと思われる日英語慣用句を取り上げて対照してみる⁶。まず、「目をつける」と have an eye on を見てみよう。(以下に示す意味特徴の詳細については、図 4.2.1 と図 4.3.1 を参照。)

図 4.4.1

| 慣用句\特徴 | S 1 注目 | S 2 | |
|----------------|-----------|-----|----|
| | | 目的 | 用心 |
| 目をつける | + | + | - |
| have an eye on | + | ± | ± |

4.2、4.3 で見てきたように、これらの慣用句は両方とも<対象を目的とする>という意味を示し、【もの】(または【人】や【抽象物】)を手に入れたいと思ったりそれらに着眼

するという様子を表す（用例(1)と(9)を比較のこと）。この意味では、「目をつける」と have an eye on はほぼ対応していると思われる。ところが、「目をつける」が<対象を目的とする>という特徴を持ち<対象に用心する>を持たないのに対し、have an eye on は両方の特徴に関してニュートラルで、時に<対象を目的とする>ことを表し、時に<対象に用心する>ことを表す（用例(9)(10)を参照）。

つづいて、「目を光らせる」と keep an eye on だが、両者には共通する特徴が多いと思われる。

図 4.4.2

| 慣用句\特徴 | S 1 | S 2 | | S 3 | | S 5 | | C 1 | |
|----------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|--------|-------------|-------------|
| | 注 目 | 目 的 | 用 心 | 狭 い | 広 い | 現 非 現 | ・ 現 | 自 動 性 | 他 動 性 |
| 目を光らせる | + | - | + | + | - | ± | ± | - | + |
| keep an eye on | + | - | + | + | - | + | - | - | + |

これらの慣用句は<対象に用心する>及び<注意の範囲が狭い>という意味素、また<他動性>という類素を共有していると思われる（用例(5)と(7)、(11)と(13)を参照）。しかし、keep an eye on が<対象が現われている>という意味素を有している（用例(11)(13)）のに対して、「目を光らせる」は、<対象が現われている><対象が現われていない>という特徴に関してはニュートラルだと言えそうである。例えば、用例(7)には、対象が現われているが、用例(5)には現われていない。

さらにいえば、keep an eye on が<プラス価>の動作も<マイナス価>の動作も表せるのに対して、「目を光らせる」には<プラス価>は含まれないようである。つまり、「目を光らせる」は悪いことや不正・あやまちがないかと対象を鋭く観察するという様子を表す（用例(5)(7)）。keep an eye on も同様の意味を表す場合がある（用例(11)(13)）が、そのほかにも、世話をしたりいたわったりするために、相手を見守るという意味（<プラス価>の行動）を表す場合がある。以下の用例を参照。

(15) Lata said: 'Ma, you shouldn't worry about him. Savita keeps a careful eye on him, and so does his mother.' (Vikram Seth, A Suitable Boy (Vol.1) p. 602)

「ママ、彼のことを心配しなくてもいいのよ。サヴィータが、彼の面倒をよく見て

いるし、彼のお母さんもそうなのよ」と、ラタが言った。

次に、「目を配る」と keep an eye out を突き合わせてみると、共通点は認められるものの、一対一の完全な対応は見られないようである。

図 4.4.3

| 慣用句\特徴 | S 1 | S 2 | | S 3 | | S 5 | |
|-----------------|-------------|-----|--------|--------|--------|-----|-------------|
| | 注 目 的 | 目 | 用 心 | 狭 い | 広 い | 現 | 非 ・ 現 |
| 目を配る | + | - | + | - | + | ± | ± |
| keep an eye out | + | - | + | - | + | - | + |

「目を配る」と keep an eye out は両方とも<対象に用心する>及び<注意の範囲が広い>という特徴を有していると思われる（用例(6)、(12)と(14)を参照）。また、これらの慣用句は両方とも、今のところは現われていない対象の出現を、見逃さないように警戒するという意味をもつ（同上の用例を参照）が、英語の keep an eye out がこの特徴のみを持つものに対して、日本語の「目を配る」の方は<対象が現われている><対象が現われていない>に関しニュートラルだと言えるようである。例えば、次の用例の「目を配る」は<対象が現われている>の方を表している。

(16)財前又一は、一番末座に控え、次々に運ばれる料理と芸者の出入りに、そわそわと目を配っていた。(山崎豊子『白い巨塔』(下) p.120)

5.残された問題点と今後の課題

以上のように意味特徴を抽出して考察すると、日英語慣用句の間には対応しそうなものも確かに見られるが、むしろ意味の区切り方のずれや違いにこそ注目すべきであろう。また、4.2 と 4.3 で設定した意味特徴は今回の分析に関しては有効だったと考えられるが、意味特徴の立て方や語彙の場の設定に関しては、幾つかの問題が残っている。

まず、3.2 で指摘したように、特徴を引き出す際、意味の言い換えにとどめてしまう場合があった（例えば、<対象を目的とする><対象に用心する>）。今後は、意味特徴の立て方と、その設定の妥当性について論じる必要があり、意味特徴をもう一段階抽象化す

る方策を考えなければならない。

また、対照研究を行う場合、意味素の対応性について問題が生じがちである。つまり、研究者の立てる特徴が、ある特有の言語や文化に依存し、対象とする言語ごとに、意味素の価値が異なるという不公正さを孕んでいる。今後は、意味特徴の対応性を高めるために、それらの言語・文化に対する依存度を洗いだすことを目指さなければならない。

「語彙の場」の設定に関しては、「多義的慣用句」の問題を指摘すべきである。即ち、同一の形式が複数の意味を持っているもの（例えば、「あぐらをかく」「目をつぶる」など）で、慣用句の「語彙の場」を設定する段で、「多義的慣用句」をどう位置づけるべきかを考えなければならない。

なお今回は、多々ある「目」の慣用句の場の一つをとりあげただけで、この結果だけを見て、日英語間に意味上の対応や相違に一定の傾向があるとは到底いえるものではない。今後は、個々の場の分析を積み重ねた上で、慣用句という言語表現の特性、及びその日英語間の異同について更に一步深めた考察を目指すこととしたい。

【注】

¹ 伊藤（1989、1992）はドイツ語の慣用句を対象としているが、提唱されている特徴の分類は日本語や英語の慣用句にも当て嵌まると思われる。原文では、特徴を表す用語はドイツ語であり、本稿中の訳語は筆者によるものである。

² 語彙素とは、「語彙の内容単位が言語体系内で表現を与えられ」たものである。例えば、ラテン語に置ける内容 *senex*（<人が>老いた）は語彙素である。（コセリウ 1982b p.173）

³ 意味特徴の分布、対照分析の結果はマトリックスで示す。慣用句が意味特徴を有するか否かは「+」「-」、特徴に関してニュートラルである場合は「±」で表す。意味素（*sème*）は「S」、類素（*classème*）は「C」で表し、分析の解説のなかでは、意味素と類素に<>をつける。

⁴ 本稿の 2.で述べたように、固定性の程度の低い慣用句のなかには、構成要素が入れ替わるものがある。<注目する>ことを表す慣用句のなかには、複数の形式を持つものが認められる。日本語の場には、「目が光る／目を光らせる」という、自動詞・他動詞の言い換えができるものがある。一方、英語の場には、keep an eye out / keep an eye open / keep one's eyes skinned / keep one's eyes peeled という、構成要素が置き換えられる慣用句が見られる。

本来なら、このような「変形」のそれぞれの形式が、共通の意味特徴を持っているかどうか、また、その語彙の場の他の慣用句とどのように対立しているかを検討しなければならない。しかし、紙幅の制約により、上記の英語の「変形」のうち keep an eye out の分析のみをここに示すことにする。筆者の内省から言えば、他の形式は keep an eye out と同一の意味特徴を持ち、それぞれの形式は互いに自由に置き換えられる。強いて言えば、文体のレベルにおいて、丁寧さの程度に違いが見出せるかもしれない。つまり、keep one's eyes peeled / keep one's eyes skinned は、keep an eye out / keep an eye open に較べ、どちらかというと俗な表現である。

° 例えば、「目を向ける」は比喩的な慣用句として機能する場合には、<注目する>という価値を表しているように思われる（例「テレビ界がやっと質に目を向けた」）。ところが、それと同時に、<対象へ視線を移す>という物理的な動作を表す場合がある（「耳もとで、どなるように云うと、看護人は信太郎に眼を向けた」）。このような「多義的慣用句」の扱いについては更に検討する必要があるが、現段階では、とりあえず「目を向ける」は<対象へ視線を移す>という特徴を持っており、「目をやる」（英語慣用句 turn one's eyes to、cast one's eyes to）とともに、一つの「語彙の場」を構成していると考えられる。

° 「目が届く」に対応する英語慣用句は見あたらない。この日本語慣用句の意味は英語では非慣用表現によって表されるように思われるが、ここではその考察を省略する。

【参考文献】

- 石綿敏雄、高田誠 1990 『対照言語学』桜楓社
- 伊藤眞 1989 「Phraseologie をめぐる諸問題」『福岡大学人文論叢』第21巻第1号：385-411.
- 1992 「慣用句の意味構造」『筑波大学現代語・現代文化学系 言語文化論叢』第35号：93-108.
- コセリウ 1982a 西村牧夫訳「通時構造意味論のために」宮坂豊夫・西村牧夫・南館英孝訳、『構造的意味論』（コセリウ言語学選集1）三修社：3-80.
- 1982b 西村牧夫訳「語彙素構造」同上収録：165-184.
- 柴田省三 1975 『語彙論』（英語学大系第7巻）大修館書店
- 宮地裕 1982 「慣用句解説」宮地裕編『慣用句の意味と用法』明治書院：238-265.
- 1985 「慣用句の周辺 — 連語・ことわざ・複合語 —」『日本語学』第4巻第1号

明治書院：62-75.

—— 1986 「日本語慣用句考」『大阪大学文学部共同研究論集3 日本語・日本文化研究論集』：1-25.

Coseriu, Eugenio, and Horst Geckeler. 1981. Trends in Structural Semantics.

Tübingen: Narr.

Cruse, D.A. 1986. Lexical Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.

Lyons, John. 1977. Semantics (Vol. I). Cambridge: Cambridge University Press.

【用例引用資料】

『日本語慣用句用例集』（宮地裕編 1985 大阪大学文学部）

『毎日新聞』1992年10月

CobuildDirect Corpus (CobuildDirect)

The Wellington Corpus of Written New Zealand English (NZ)

筆者の手元にある資料（新聞、雑誌、小説など）から収集した英語の用例

【謝辞】

本稿をまとめるにあたっては、高田誠先生に終始きめ細かなご指導をいただき、また、岡崎敏雄先生と坪井美樹先生には大変有益なご指摘をいただきました。深く感謝いたします。そして、落合理子さんは草稿の検討に加わり、校正を引き受けてくれました。心より感謝いたします。